

書評

井上新平, 安西信雄, 池淵恵美 編

精神科退院支援ハンドブック

ガイドラインと実践的アプローチ

福田正人

退院支援実践例が充実した、理解と実感を助けてくれる 1 冊

日本の精神科医療は、重症化した精神疾患患者に入院医療を提供すること、そのための医療施設を私立の精神科病院に求めることを、国が施策の中心としてきた歴史がある。そのために精神科病床が全病床の 20% 以上を占め、しかも長期入院や社会的入院の患者が多いという、世界の中で例外的な状況にある。退院を支援するためのハンドブックとしてガイドラインと実践的アプローチを示した本書は、そうした日本の精神科医療の残念な現状を反映している。

本書は、「退院支援ガイドライン」と「ガイドラインに基づく退院支援の実践」の 2 部から構成されている。第 1 部は、厚生労働省精神・神経疾患研究委託費の研究成果を基にまとめられた、46 ページからなるガイドラインの紹介が中心である（主任研究者：安西信雄「精神科在院患者の地域移行、定着、再入院防止のための技術開発と普及に関する研究」）。第 2 部ではガイドラインの具体化として、前半で退院支援の実践について 8 つの側面を詳説したうえで、後半で「特色ある取り組み」として 8 つの実例が紹介されている。

退院支援の専門家ではない評者にとっては、第 1 部でガイドラインとしてまとめられた普遍的な解説以上に、第 2 部、特にその後半の具体例の紹介が印象的であった。たとえば、富山・谷野呉山病院における「グループ退院実践」の資料として掲げてある発会式と退院式の式次第は、ささやかなものであるだけに当日の様子をほうふつとさせてくれる。また、東京・巣立ち会が建設したグループホームの写真と家賃・家主・建設経緯の表は、一般化できるものではないかもしれないが、後に続く者に勇気を与えてくれる。

第 2 部前半の退院支援実践の 8 つの側面の記載においては、図表と事例が充実しており、退院支援初心者への理解と実感を助けてくれる。たとえば、「薬物療法の工夫」の章では、さまざまな用紙やリストが紹介されている。いずれもシンプルなもので、作成者が臨床での試行を繰り返す中で、実践で必要となるエッセンスを磨きあげてきたものと想像できる。また、班研究で開発した「退院困難度尺度」や国立精神・神経医療研究センター病院で用いられている「社会復帰病棟ケースカンファレンス用紙」「生活準備チェックリスト」はいずれも簡便なもので、作成者の現場感覚が生きて伝わってくる実用性の高いものである。

評者が残念に感じたのは、こうした貴重な具体例や図表や事例が見つけにくくなりやすいことである。索引は充実しているものの、目次は中項目までで小項目は含まれておらず、また図表や事例の一覧表がないため、一度目にした資料を見つけるのに苦労することが多い。ページ数の制約があったのだろうが、「ハンドブック」として活用しやすいよう、増刷の際にぜひ追加をご検討いただきたい。

退院支援は、一部の専門家や研究者だけが携わる特別なテーマではない。全国の精神科スタッフが常識として身につけ、普段の仕事として日々取り組むべき課題である。本書がそうした実際の退院支援の取り組みに役立ち、1 人でも多くの当事者の退院と地域生活へと結び付くことに、本書の価値が示されていくだろう。その実績こそが、本当の意味での「書評」であると思う。

(群馬大学大学院神経精神医学)

●B5 284 頁 2011 定価 3,990 円(本体 3,800 円+税) 医学書院